



イイケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 612 回 「言論の自由」とは、何か？

2015.1.18

フランス内務省は11日、週刊紙銃撃など一連のテロ事件を受けてパリで行われた大規模デモの参加者は120万～160万人と発表した。パリを含めた全土でのデモ参加者は、計370万人に達し「フランスの歴史上最大」とした。

反テロリズム行進には、フランスのオランド大統領を先頭に、政治信条や属する民族、信じる宗教を越えてフランスのあらゆる層の人々が参加した。ドイツのメルケル首相、英国のキャメロン首相、イタリアのレンツィ首相、イスラエルのネタニヤフ首相、パレスチナ自治政府のアッバース大統領、ロシアからはラヴロフ外相など、様々な国々の指導者、政府高官らも、フランスの人々を支持するため、パリに集まった。日本からは鈴木庸一駐フランス大使が参加したようだ。

いかなる形のテロリズムにも断固として反対する思想は、人類であれば当然のこと。更に、「言論の自由」を粉砕する行為は、断固として許すべきでない、デモに参加した人はこんな共通の「怒り」を抱きながら、全世界に対し訴えた行動だった。連日のマスコミ報道は、総じて壮大なるパフォーマンスを賛美したのである。

時を同じくして、韓国の法相が、15日に期限を迎える産経新聞の前ソウル支局長の加藤達也記者の出国禁止措置を、16日からさらに3ヶ月延長した。

この報道を、どのくらいの人知っていたのだろうか。

これにより、加藤記者は、昨年8月7日の出国禁止から現在まで、その間、反日韓国人からの攻撃対象とされ、異国において不安な、不自由な生活を余儀なくされている。韓国政府は、加藤記者が置かれたこの生活環境を承知の上で、「韓国抑留」を続けているのである。

これに対し日本政府は何ら行動を起こさないし、マスコミもフランスデモの1/100すら報道していない。結果、国民のほとんどが、無関心のまま、韓国の決定が公然とまかり通っている。

昨年、韓国では、客船セオル号が近海で沈没し大勢の高校生が救助されずに死亡するという痛ましい大惨事が起こった。その時、韓国大統領が、何をしていたのか、誰と会っていたのか、不明であると韓国のマスコミが伝えた。そのマスコミが伝える韓国民の、大統領の事故時の動静に対する疑念を、加藤記者が韓国マスコミの記事を紹介して日本に伝えた。

マスコミ人として、当然のことではないか。

「言論の自由」とは、何なのだろうか？

全世界中を巻き込んで「言論の自由を守る」という大義名分を掲げた大規模デモの思想は、韓国だけは別、相手がフランス人ではなく、悲しいかな、たった一人の日本人だから…。

「言論の自由」を標榜するヨーロッパの報道は、彼らの風刺画に紹介された日本人の姿が、二十世紀の半ばまで「猿」だったことすら「自由」としている。

テロは許すべきでない、「言論の自由」は厳守すべき…彼ら言っていることはすべて正しい。

しかし、今回の事件とその報道は、何かしつくりとせず、喝采を叫ぶことはできなかった。

私にとって、あのデモの先頭に、安倍首相がいなかったことが、せめてもの慰めかもしれない。